

博士論文審査要旨

高山裕二氏論文題目

近代社会の誕生と無関心という病  
—トクヴィルとフランス自由主義思想の系譜—

早稲田大学  
大学院政治学研究科

## 1. 論文の構成

高山裕二氏の博士学位申請論文「近代社会の誕生と無関心という病——トクヴィルとフランス自由主義思想の系譜——」は、A4 横書きで 310 頁、およそ 40 万字からなる研究である。その構成は以下のとおりである。なお章よりも下位の項目は省略する。

### 序論 近代社会の不安とリベラルの課題

- 一 問題の所在
- 二 先行研究とアプローチ
- 三 本稿の構成

### 第Ⅰ部 初期リベラルと自由主義の誕生：啓蒙主義とロマン主義の間

- 第 1 章 スタール夫人とロマン主義的リベラル：「自己犠牲」と〈宗教感情〉
- 第 2 章 コンスタンとリベラル理論の洗練：功利主義批判と〈自己の動揺〉

### 第Ⅱ部 個人主義の心理：トクヴィルのアメリカ旅行と近代社会の病理

- 第 1 章 利己的個人の共和国と実利主義の両義性
- 第 2 章 ロマン主義の世代と「社会なるもの」の登場

### 第Ⅲ部 個人主義の論理：トクヴィルの汎神論批判と懐疑

- 第 1 章 「自己の信仰」と〈全体の信仰〉：世論か宗教か？
- 第 2 章 理性と信仰：パスカル的懐疑と政教分離の意義

### 第Ⅳ部 モラリストの市民社会像：「感情の政治学」に向けて

- 第 1 章 名誉と権利：利己主義の再検討
- 第 2 章 共感と想像力：私的領域と市民結社

### 結論 トクヴィルと近代性：リベラル<sup>モダニティ</sup>精神<sup>マインド</sup>の行方

### 参考文献

## 2. 論文の概要

本論文は、19世紀初期に誕生したフランスに独自の自由主義思想の系譜を明らかにするとともに、特にトクヴィルのデモクラシー論を同時代の文脈のなかで検討することを通じて、近代社会の誕生以後のリベラルが直面した問題は、同時代のロマン主義者が描き出した「無関心（アパシー）という病」であることを明らかにする論考である。本論文は、トクヴィルの書簡や草稿など豊富な資料を駆使して、かれがそのような文脈において向き合った問題が、近代の人間の普遍的な境遇のそれであったことを明らかにしようとする意欲的な論考である。

本論文は4部構成をとり、第Ⅰ部では初期リベラルのスタール夫人とコンスタンの思想が検討され、第Ⅱ部からⅣ部ではトクヴィルのデモクラシー論が考察されている。第Ⅱ部では個人主義の心理の側面から、第Ⅲ部では個人主義の論理の側面から近代社会の「無関心という病」が分析され、第Ⅳ部では、無関心が流行する近代社会において、トクヴィルが構想した市民社会像、名誉心や共感に関する感情論に着目して明らかにしている。

まず序論で、近代の合理主義あるいは感覚主義に対するロマン主義という「精神的革命」を背景に、フランスの自由主義思想が誕生したことが示されるとともに、スタール夫人やコンスタンら初期リベラルとトクヴィルとのあいだには「近代社会」誕生にともなう思想的断絶があることが示される。また、近代人の不安に応答するかたちで生じたロマン主義思想の影響が色濃いフランスの自由主義思想の考察は、人間を計量化するような合理的な科学とは異なる政治学の在り方の構想に寄与するとの著者の展望が示されている。さらに、第2次大戦後のトクヴィル研究の動向を整理したうえで、本論の独自の論点が明らかにされている。そこでは、近代社会の問題が不安や無気力を含む「無関心」にあるというロマン主義者の問題関心をトクヴィルが共有し、それがかれの思想の中核に位置することを論証することが本論文の目的であるとされている。同時に、かれの書簡を丹念に分析することを通じて、ロマン主義者とは異なるトクヴィルの超越的な契機の探求は、パスカルをはじめモラリストの系譜に位置づけられるものであるという仮説が提示されている。

第Ⅰ部では、初期リベラルのスタール夫人とコンスタンの思想が検討され、フランスの自由主義思想が啓蒙主義とロマン主義のあいだで生成したことの意味を明らかにしている。啓蒙主義の側面とは、まさにスコットランド啓蒙のアダム・スミスが主張したように、自由と商業の親和的關係を論じ、市場社会の競争が物質的にだけでなく精神的にも、個人、そしてさらには人類を

も発展させると考えられたことである。その一方で、本論文は、スタール夫人では『ドイツ論』や小説、コンスタンでは『政治文学論集』や小説など、政治思想の分野では従来あまり注目されてこなかったテキストの分析を通じて、18世紀の唯物論や19世紀初頭の功利主義に対する彼女たちの批判が、功利の規準ではとらえきれない人間の内面感情を重視するロマン主義的側面を有していたことを論証している。フランス革命を青年期に迎え、その意味で政治的情熱が沸騰した時代を生きた彼女たちにとっては、旧社会からの解放を志向する人間の情熱は人類の理性の進歩という啓蒙の理念となんら矛盾するものではなかった。そのように人類という全体に対する自己犠牲を徳として称揚する点では、フランス初期リベラルには、近代的リベラルとは言えない側面があることを本論文では強調している。

初期リベラルの調和とそれを可能にした「第3者の審級」への信頼を喪失し、まったく自己のうちに投げ返され、理性と感情の調和が乱れて不安を抱えはじめる、その意味で「近代的な」個人を、コンスタンの小説『アドルフ』は予告しているが、コンスタンはそれを自己の外部にある社会問題とは見なしえなかったことが第Ⅰ部第2章の最後で指摘されている。本論文では、この「近代的」問題をはじめて真剣に受け止めざるを得なかった思想家としてトクヴィルが位置づけられている。第Ⅱ部では、主に『アメリカ旅行記』と『アメリカのデモクラシー』をもとに、トクヴィルのアメリカ旅行の社会観と自然観を同時代のロマン主義の影響を踏まえて分析し、近代社会の無関心という病が心理的側面から検討されている。

第1章では、トクヴィルが、『アメリカのデモクラシー』第1巻で、もっぱら自己利益を考慮して行動する近代的人間のなかにも自由な民主的体制が生まれる可能性を発見したことが、『アメリカ旅行記』の検討も踏まえて論じられている。これに対して第2章では、トクヴィルが『アメリカのデモクラシー』第2巻では、そのような近代的人間から構成される社会においては、ロマン主義者たちが考えたように個人の自由が予定調和的に保障されることはなく、解放された人間は個人としては脆弱で、それに反して社会それ自体の力は強大化し、また、市場社会のなかで人間が物質的幸福の追求に没頭するなかで政治への関心を失い、さらにはその追求のなかで不安や無力感を含む無関心という病に感染するという、近代社会の矛盾を指摘していることが示される。本論文では、この「無関心」こそが近代社会の最大の病であるとするトクヴィルの議論が、産業主義のイデオロギーであったサン・シモン主義への批判を前提にしていることを論証するために、同時代のサン・シモン主義の思想や、またこれに批判的なトクヴィルの書簡などの記述が丹念に分析されている。

第Ⅲ部では、トクヴィルが『アメリカのデモクラシー』第2巻の小さな章で論じた汎神論に、

著書全体に通底する論理を読みとりながら、関心を自己に集中する時代である近代にも、ある種の信仰が生まれる精神的構造を明らかにしたうえで、これに対して批判的であったトクヴィルの宗教論が論じられている。第1章では、個人がバラバラになり、自己以外のものに知的精神的に無関心になる時代に、かえって全体が実体化されそれが信仰されるという論理を『アメリカのデモクラシー』から析出すると同時に、トクヴィルが影響を受けたと考えられる雑誌『両世界評論』の諸論文の読解を通じて、そのような論理を分析するうえでかれの念頭にあったのはドイツ観念論を輸入してきたフランスのクザン学派であったことを論証している。トクヴィルは平等を分析の基礎概念としながら、思考を一般化するデモクラシーの知的精神的傾向を指摘したうえで、最終的に精神と物質の境界をも排除して世俗社会に神を内在させる同時代の「汎神論」は、各人固有の存在意義を脅かす危険があることを指摘したことが本論文では明らかにされている。

第2章では、トクヴィルには、このような汎神論を、「人間には絶対（確実）を必要とする欲求、知的精神的権威なしには耐えられない存在条件をもつ」という観点から論じる点で、パスカルの影響があることが指摘されている。トクヴィルは、人間の自由や社会道德には「共通の信念」が必要であると主張する点で伝統的なカトリック思想家あるいは市民宗教論者とみなされてきたが、本論文では、トクヴィルの宗教論が人間個人の精神の尊厳を擁護するという次元で論じられ、少なくとも『アメリカのデモクラシー』第2巻では社会以前の個人の精神の問題として議論が展開されていることが示されている。また、トクヴィルの書簡の分析を通じて、かれが、特定の身分や社会や信仰（神）に自己同一化（合一化）することを妨げる懐疑につねにとらわれていながら、それでも「超越性」を探究し続けたことが明らかにされている。それゆえ、かれは、社会のなかに神（精神権力）を内在させるようなロマン主義の思想傾向からはつねに距離をとっていたこと、そしてそれが、各人固有の精神の尊厳を脅かす危険にかれを敏感にさせたことが、本論文では明らかにされている。

第IV部では、無関心の広がるデモクラシーのなかでいかに人びとが関係性を形成することができるのか、市民社会の精神的な動因となりうるものはなにかについて、トクヴィルがデモクラシーの習俗ないし「人間の関係」を論じた『デモクラシー』第2巻第3部に即して、名誉や共感という感情に着目しながら分析がおこなわれている。第1章は、『デモクラシー』における名誉と利害関心の関係、また権利概念について論じている。そこでは、トクヴィルがアリストクラシーの名誉の効果に注目するとともに、貴族の名誉もまったく無私なものではなく「自己利益」から生まれるものであることを指摘したことが示されている。自己利益それ自体を評価するわけではないが、それが他者への関心の誘因となるという意味で逆説的な効果をもつことに注目して利

己主義を問い直している点で、トクヴィルの思想はモラリスト的なものであることが本論では強調されている。また第2章は、デモクラシーの感情としてもっとも評価の高い共感について分析している。確かにトクヴィルの共感概念にはルソーをはじめロマン主義の影響を見出すことができるものの、それと同定することはできない「近代性」を有していることが本論文では強調されている。トクヴィルにおける共感は、自他を融合させるようないわば内向化作用ではなく、自己と他者とのあいだに想像力を働かせる外向化作用をもつものであること、またアソシアシオンも、同様な観点から自他の同質的な仲間集団ではなく、それぞれ異質な関心をもつ自他の集団として評価されていることが本論では示されている。トクヴィルは、利害関心を行動の主要な動機とする近代的人間を前提にして市民社会の可能性を探究した、と本論文では主張されている。

結論では、以上の議論をまとめたうえで、過去（伝統）も未来（進歩）も信仰できなかったトクヴィルの精神的緊張が生んだ近代理解は両義的なものであること、反合理的に趣味や本能に惑溺せず、だからといって人間の合理性を信奉することもないこと、どちらか一方に偏向して精神を麻痺させる無関心という近代の危険に批判的であり続けることこそ逆説的にデモクラシーの条件のもとで自由を擁護するために必要であることが最後に主張されている。

### 3. 論文の特徴と評価

本論文の特徴は、なによりも第一に、トクヴィルの『アメリカにおけるデモクラシー』第2巻の思想的文脈が同時代のロマン主義にあることを、かれの主著にとどまらず、書簡や草稿など広範な資料の分析によって明らかにしていることにある。それによって、ロマン主義者と共有する関心が明らかにされると同時に、ロマン主義者とは異なるパスカル的な懐疑ならびに「超越性の探究」がかれの精神生活のうちにあることが明確に示されており、この成果に、最も評価すべき本論文のオリジナリティと、トクヴィル研究への貢献を認めることができる。そこでは、トクヴィルにとって自らの在り方を問うことがデモクラシーの問題を問うことに結びついていたという理解を前提にして、かれの書簡や草稿に注目しその編集作業を進めてきた近年のフランスを中心としたトクヴィル研究の成果が十分に生かされている。

次に、トクヴィルの思想を、近代啓蒙主義の広い思想史的文脈の中に位置づけ、かれが「境遇の平等（化）」という近代社会の普遍的な条件に最初に真剣に向き合った思想家であることを論証したことに、本論文の第二の特徴がある。その論証のために、かれ以前の初期リベラルについて最初に十分に考察し、それによってそれとトクヴィルの思想との違いを明確にするとともに、近代社会の無関心がかれの同時代的な問題でもあることを、とくにバルザックのテキストを効果

的に引用しながら明らかにしていることは、本論文の大きなメリットである。

さらに本論文の第三の特徴として、トクヴィルの宗教論が近代人の不安という実存的問題に深くかかわるものであることを明らかにしていることがあげられるが、これはかれにおける政治と宗教の問題への新しい角度からのアプローチとして評価できる。とくにトクヴィルが『アメリカのデモクラシー』の小さな章で論じた汎神論に、かれの思想全体に通底する論理を読みとりながら、世俗化の時代の近代にもある種の信仰が生まれる精神的構造が明らかにされている。論者はまず、トクヴィルの議論の背景を、スピノザ哲学の受容やドイツロマン主義の影響の下に汎神論が当時のフランスの知的流行となっていた事実を確認する。その上で、トクヴィルの独自性は、自然の中に神の遍在を見る汎神論の論理を個と全体、個人と社会の問題に転位したところにあると論者は言う。画一的な個人の普遍的析出が逆説的に全体としての社会の絶対化を導く危険な傾向を民主社会に見出したトクヴィルにとって、汎神論こそはそうした精神傾向の哲学的表現と映ったのである。トクヴィルの汎神論批判についての論者の周到な検討は、同時代の歴史的文脈におけるテキストの理解としての的確であるだけでなく、トクヴィルにおける近代精神のディレンマの自覚の意味を明らかにした点においても、本論文の最も独創的で説得力のある成果といってよい。個人がバラバラになり、具体的な他者に無関心になればなるほど、かえって（社会）全体が信仰されるという問題を、近代社会一般が抱えた「個と全体」のディレンマとして主題化しながら、本論文は、このような神（精神権力）を社会のなかに内在させるような汎神論に対するトクヴィルの批判的な視座を、かれの精神生活に見られる「超越性の探求」に着目することで明らかにすることに成功している。

こうした成果の一方で、今後の課題とすべき点も残されている。

第一に、トクヴィルの同時代的な問題関心を強調することで、逆にその時代におけるトクヴィルの独自性を不明確にしてしまった側面がある。たとえば、本論文で説得的に主張されているようにトクヴィルは「無関心」という問題についてフェリシテ・ド・ラムネと問題を共有していたが、トクヴィルがかれとどの点で異なるのかは必ずしも明確ではない。パスカルとの比較についても同様のことが指摘でき、かれらがパッションの問題を人間精神の問題として論じ、トクヴィルもとくに『アメリカのデモクラシー』第2巻では同様に人間精神を考察しているものの、トクヴィルの場合は、その背後に独自の社会関係の分析がある。つまり、アリストクラシーの社会からデモクラシーの社会への移行に関するかれの社会学的な分析が、本論文の強調するパスカル的な人間精神の分析に十分に接合されているとはいいがたい。

第二に、トクヴィルの精神生活に焦点を当て、かれの政治・社会分析を明らかにするという方

法論は、トクヴィル研究の最先端で進められつつあるもので魅力的ではあるが、それはある固有の欠陥を免れない。思想家の精神生活と政治生活のヴィジョンがどこまで緊密に結びつけられるかは、トクヴィルにかぎらずいかなる思想家ないし知識人においても問題がつけねに残る。たとえば、トクヴィルの場合であれば、精神的自由はトクヴィル個人の問題だけでなく、デモクラシーの時代を生きる人間一般にとっての問題でもあるのか、少なくともトクヴィルがそのようにどこまで真剣に考えていたかはほとんど検討されずに終わっている。

最後に、これは本論文がデモクラシーにおける人間精神のあり方に関心を集中し、通常の意味での政治思想上の論点をほとんど論じていないことと関連するが、第1部における初期リベラル、スタール夫人やコンスタンとトクヴィルとの比較については、問題を指摘せざるを得ない。政治思想史の通念において、スタール夫人やコンスタンとトクヴィルとの関連はなによりもフランス自由主義におけるイギリス観の問題として取り上げられ、論者自身もスタール夫人のイギリス論には触れている。ところが、トクヴィルがこれをどう継承し、あるいはどの点で異なるかという論点はその後の行論の中でまったく消えてしまっている。もちろん、トクヴィルのイギリス観の全面的検討には『アメリカのデモクラシー』だけでなく『アンシャン・レジームと革命』の本格的分析が不可欠である。しかし、本論文の分析が『アメリカのデモクラシー』に焦点を当てているからといって、この問題の回避が正当化されるわけではない。イギリス立憲体制の精神的基盤として宗教的契機を強調するのは、スタール夫人にしろコンスタンにしろ、あるいはギゾーにしても、フランスにおけるプロテスタントの自由主義者の通念である以上、イギリス観におけるトクヴィルと初期リベラルとの比較は、宗教を中心的関心とする本論文として当然に扱うべき論点だからである。もっとも、こうした問題点は本論文の価値を大きく損なうものではなく、論者もよく自覚しており、今後の研究のなかで克服されていくものと思われる。

#### 4. 結論

本論文は、その形式、論理の展開、参照された文献、それらによって提示された学問的な知見と主張から判断して、博士論文としての条件と水準を十分に満たしているとみなすことができる。論者のトクヴィル研究は、トクヴィル研究のみならず、政治理論研究一般にも新しい視座を提供するものとして、ひろく貢献するであろうし、また本論文を出発点として論者自身の今後のさらなる研究の発展が期待される。よって本論文は博士（政治学）の学位を授与するに値するものと認められる。



2009 年 7 月 16 日

審査員（主査）	早稲田大学教授	佐藤 正志
	早稲田大学教授	齋藤 純一
	早稲田大学教授	松本 礼二